

ガーデン・コンサート

中村 龍介

昨年の夏、友人のパイプオルガン奏者・児玉麻里さんから軽井沢でガーデン・コンサートを予定するので行かないかと誘われた。おそらく、児玉さんがピアノでも弾くのだろう。気軽にOKした。六人ほど出かけるというから、私よりも車を期待されているらしかった。

その日が近づいてくると、どうも様子が違う。東京からの六人は出演者で、観客は現地で集めるのだという。

詳しく聞いてみて、とんだ勘違いが判明した。児玉さんの知人のS氏は軽井沢の有力者で、自宅の庭に町会議員たちを集めて、バーベキュー・パーティとミニコンサートを開くとのこと。我々は出演者で、演目も決まっているらしい。

「KさんとTさんは得意のフラダンス。Wさんはシャンソンが専門でしょ。Iさんには朗読をやってもらおうわ。それで、龍介さんはロシア民謡でいいわね」

毎年、クリスマス会で集まったときにやる、隠し芸大会のみんなの演物（ダシモノ）だ。

「ちよっと待って下さいよ。僕は児玉さんがピアノでも弾くものとばかり思っていました。自分が歌うなんて想像もしていませんでしたよ」

「S邸にはピアノはないのよ。私は司会。フッフ…」

「どういう人が聴きにくるのですか」

「Sさんは、以前、軽井沢の町会議長をされていたの。多分、町会議員やその家族の方たちが三十人ほど集まるはずよ」

「それは、僕には荷が重すぎますよ。ドタキャンさせてほしいな」

「先方には連絡済みだし、貴方が行かなきゃ足がないでしょ」

「…」

とたんに気が重くなった。

出発の二日前、六人が集まって事前打ち合わせをもった。私は起死回生の妙案を出した。

「Iさん、何を朗読するの？」

「短編ものがいいでしょうから、芥川の『蜘蛛の糸』でも、
とまっているけど：」

「いっそのこと、僕のエッセイをやりませんか。先日、吹き
込んだもらったばかりだし。そしたら、僕はIさんの朗読の
入ったCDを皆さんに配ります。それなら、僕も一応は出演
したことになるし、プレゼントも出来るし、万々歳でしょ」

その年、数年の古希になるのを記念して、エッセイ集を
パソコン用のCDにして出版した。エッセイの朗読をお願い
したのがIさんだった。

みんなが手を叩いて賛同してくれると考えた案だったが、
Iさんの一言で思わぬ方向に展開した。

「朗読というのは、作者自身がやるのが最高なの。中村さん
御自身が朗読されるといいと思うわ」

「ナイス・アイディアだね。龍介さん、ロシア民謡と朗読。
これで決まりね」

私の困った表情を楽しむように、横から児玉さんが合いの
手を入れ、私を除く熟女たち全員が賛成に廻った。

当日の朝、二台の車に分かれて出発。中央高速の花園辺り
まで晴れていた空は、藤岡インターに差しかかる頃には一面
黒い雲に覆われてきた。

「雨天中止だったよね」
アクセル・ペダルの足を少し緩め、助手席のWさんに話し
かける。

「そう言っただらしたわね。私も最近あまり歌ってないから
自信ないの。中止なら嬉しいな」

「雨よ、降れ降れ〜っていう歌があつたよね。あの心境かな」
昼過ぎに軽井沢に着き、暫く街を散策してからS邸に向か
う。軽井沢駅の少し南にあるS邸は、広大な雑木林の一面を
切り開いて造った豪邸で、広い庭にはずらりとパイプ椅子が
並べられていた。リビングに隣接したテラスには特設ステー
ジがしつらえてあり、想像したより大掛かりな設営になつて
いた。

庭の中央にはバーベキュー・コーナーが設けられ、大型の
グリルセットが三台、中では真っ赤な炭火が獲物を攻撃する

のを待ち構えているかのように興奮していた。

横のテーブルには、牛肉、豚肉、海老、サザエなどに加え、地元で採れたという野菜やキノコがところ狭しと並ぶ。気の重い焦燥感とは裏腹に胃袋だけはグーグー鳴りだした。

来訪者たちも徐々に増え、ドリンクを手に思い思いの椅子に腰をかけて談笑している。

やがて、ステージのマイクにスイッチが入り、S氏の挨拶。町議会への復活を訴えるかのような長いスピーチが終わる。全員の拍手に深々と一礼すると、それが合図だったように、ゲストたちがグリラの周りに集まった。

煙がもうもうと立ち上がり、網の上では肉や魚が『どうぞ召し上がれ』と、旨そうな焼き目を誇示している。

狙いをつけていた海老とサザエを紙皿の上にとったとき、大粒の水滴がポツリと落ちてきた。恵みの雨！

少し離れた樹の下でWさんが骨付き肉を頬張っているのに気付いて近寄った。

「このまま食い逃げになると最高だね」

「天は私たちに味方してくれるようだよ」

だが、無念にも雨は一向に降り出さない。はかない期待を破られた私たちは、楽屋に当てられたリビングに向かった。

ステージではプログラムを説明する児玉さんの弾んだ声が聞こえる。

「プログラム一番は、中村龍介さんのロシア民謡です！」

舞台に立つと、真っ暗な中に二基のライトが左右から目を射る。覚悟は決めたはずなのに、拍手を耳にした途端、足がガタガタと震えだす。

エイッ、ままよ！ 一度深呼吸をした後、私はロシア語で『バイカル湖のほとり』を歌い始めた。

(了)